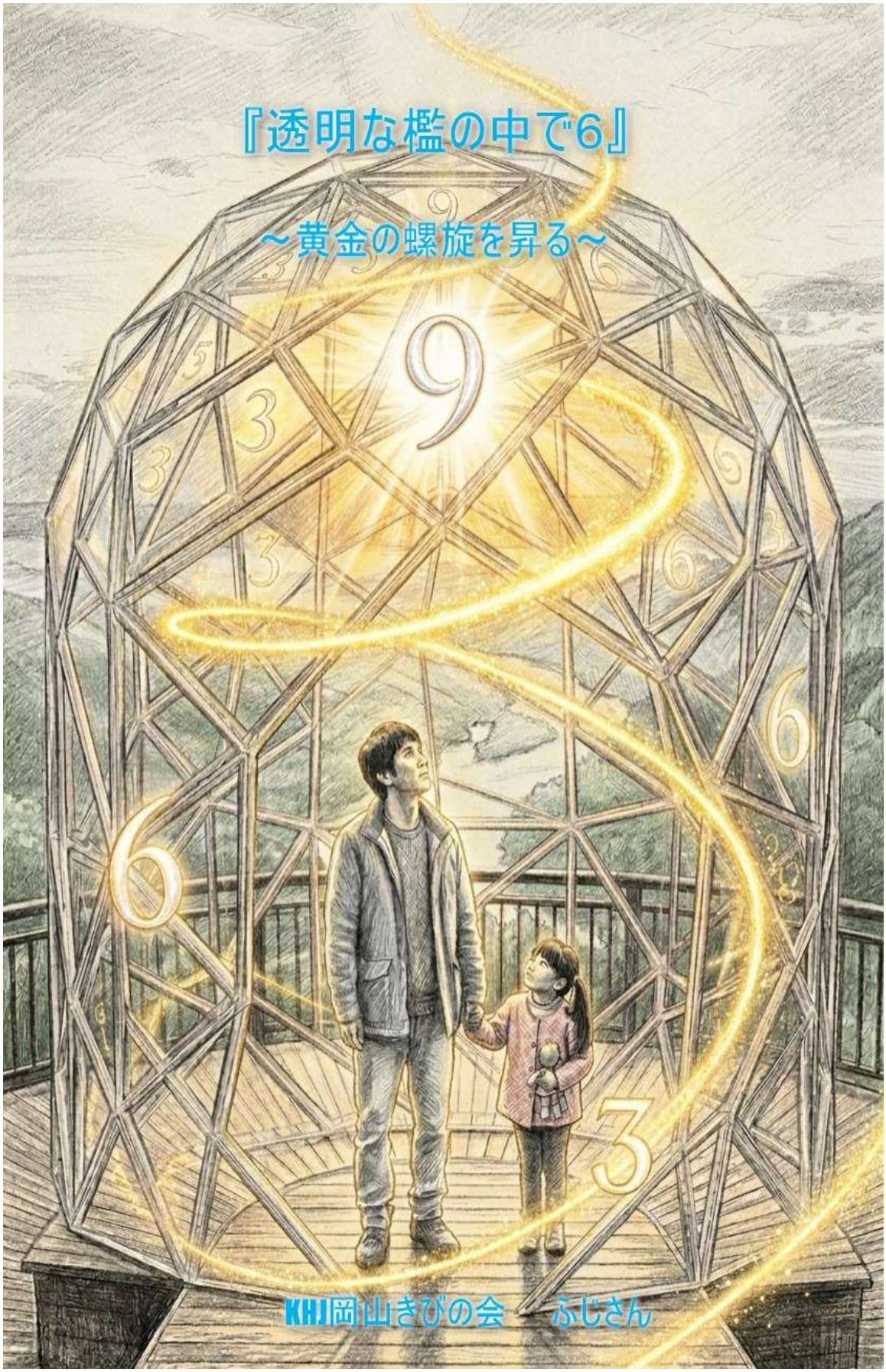
『透明な檻の中で6』
～黄金の螺旋を昇る～
KHJ岡山きびの会　ふじさん

目　　　次

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

序　章：三畳間の境界線―― 最小単位の安寧 ―― ・・・・・・・・・・・・・・・・2

第一章：デジタルな処刑―― 正解を求める群衆の暴力 ―― ・・・・・・・・・・・2

第二章：螺旋の受容―― 黄金の螺旋を昇る ―― ・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第三章：解けない数式との決別―― 不完全な生の肯定 ―― ・・・・・・・・・・・5

終　章：369 の調べ―― 宇宙の拍動とハンバーグ ―― ・・・・・・・・・・・・ 7

おわりに：登場人物解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

あとがき：問い続ける螺旋のなかで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

「透明な檻の中で６」　～黄金の螺旋を昇る～

はじめに
宇宙は数式で書かれているといいます。ニコラ・テスラが愛した「369」という数字は、単なる記号ではなく、私たちの人生の「停滞」「葛藤」「統合」を示すコードなのかもしれません。この物語は、ひきこもり、家族の崩壊、そして社会的な抹殺という絶望の淵に立たされた一人の男が、数字の調和の中に自分だけの「解」を見つけ、再び歩き出すまでの記録です。

序章：三畳間の境界線―― 最小単位の安寧 ――
湊（みなと）の人生は、長らく「3」という数字の檻の中にあった。
三畳一間の自室。一日三度の食事を運ぶ母の規則的な足音。オンラインゲームで組む三人一組のパーティ。彼はその狭い三角形の内側にいる限り、安全だと信じていた。

ひきこもり支援団体の職員が訪ねてきたとき、湊は初めて「外の数字」に触れた。ボランティア活動を通して出会った美咲は、湊にとって「1+1=2」では説明のつかない、奔放な美しさを持つ異分子だった。彼女と結婚し、娘を授かったとき、湊は人生という複雑な数式にようやく答えが出たのだと錯覚した。

しかし、現実は非情な「二元性」を突きつける。
昭和の秩序を重んじる母と、外面の美しさに執着しながら家庭を顧みない妻。お互いの「悪い面」を受容できないまま、湊の築いた家庭という図形は、歪な音を立てて崩壊し始めた。

第一章：デジタルな処刑―― 正解を求める群衆の暴力 ――
窓ガラスの結露が、街灯の光を乱反射して細かな粒状の幾何学模様を作っている。湊（みなと）は、冷え切った軽ワゴンの運転席で、震える指をスマートフォンの画面に置いた。

画面の中では、見慣れた、しかし今はもっとも忌まわしい場所となったSNSのタイムラインが、狂った時計の針のように更新され続けていた。そこには、美咲が投稿した「行方不明の夫を捜しています」という切実な文面とともに、湊の顔写真が鮮明に晒されていた。ボランティア活動の時に彼女が撮った、無防備に笑う自分の顔。その下に連なるコメントの濁流が、湊の心臓を物理的に締め付ける。

『こんな優しそうな顔して、育児放棄して逃げるなんて最低』

『奥さんがかわいそう。警察に届けた方がいい』
『この顔、どこかで見かけたら即通報ですね』

美咲は気づいていないのだろうか。それとも、気づいた上でやっているのか。「悲劇のヒロイン」という舞台に没頭する彼女にとって、この投稿が湊の社会的な息の根を止める「暴力」であるという認識は欠落している。彼女の論理では、愛する夫を心配する健気な妻という正義がすべてであり、そこに付随する個人情報の拡散や、晒された側の恐怖という変数は組み込まれていないのだ。

「……怖い……」

湊の口から、乾いた掠れ声が漏れた。ネットの向こう側にいる何千、何万という無機質な視線。かつてゲームで背中を預け合った仲間たちまでもが、美咲の「正義」に同調し、湊を叩く側に回っている。自分を構成するすべての要素が剥ぎ取られ、ただの「逃亡犯」という記号に変換されていく感覚。逃げ場のない「透明な檻」は、ついにネットという名の網となって、日本中どこへ逃げても自分を捕らえる罠に変わった。

湊はたまらずスマートフォンの電源を落とした。暗転した画面に、ひどく疲れ切った自分の顔が幽霊のように映り込む。
ふと視線を上げると、フロントガラスの向こう、冬の夜空に月が浮いていた。その輪郭は鋭く、冷徹なまでに完璧な円を描いている。

ふと思い出す。月はかつて、宇宙を支配する法則の象徴だと教わった。月の直径は2160 マイル。2+1+6+0 は「9」。あの月も、自分を断罪するネットの嵐も、そして理解不能な美咲の激情も、すべては宇宙という巨大な数式の中の出来事なのか。

「0 は、9 なんだ……」

すべてを失い、社会的な「死」を迎えた今の自分は、数秘術的には「0（Nothing）」だ。しかし、テスラコードの教えが正しければ、0 は同時に宇宙のすべてである「9（Everything）」を内包している。今はただの「0」という点にまで縮こまって、嵐が過ぎるのを待つしかない。美咲という解けない数式からも、正論を振りかざす世界からも離れて。
湊はシートを倒し、自分の拍動だけを聞きながら、冷たい月明かりの下で静かに目を閉じた。

第二章：螺旋の受容―― 黄金の螺旋を昇る ――

車中泊を始めて二週間が過ぎた頃、湊の感覚は研ぎ澄まされ、同時に奇妙な静寂に包まれていた。
狭い車内は、もはや「閉じ込められた檻」ではなく、宇宙に浮かぶ小さなカプセルのようだった。湊はエンジンを切ったまま、吐く息が白くなるのを見つめる。一呼吸、一呼吸。人間は一日に約 21,600 回呼吸するという。2+1+6+0=9。自分の命を繋いでいるこのリズムさえ、宇宙の大きな「9」に支配されている。

彼はノートを開き、暗闇の中でペンを走らせた。美咲のこと、母のこと、ネットでの批判。それらを一つひとつ、数式を解くように分解していく。

「美咲は、悪魔だったわけじゃない」

ペン先が止まる。
彼女のあの理解不能な激情、外面の良さ、無責任な依存。それらは、湊の直線的な正論（1 や 2 の論理）に対する、猛烈な「反作用」だったのかもしれない。光が強ければ影も濃くなるように、湊が「正しい夫」を演じようとすればするほど、彼女はその裏側にある「カオス」を体現せざるを得なかったのではないか。

「僕たちは、二元性（プラスとマイナス）のループに囚われていただけなんだ」

男と女。正しさと間違い。期待と裏切り。これまでは「1, 2, 4, 8, 7, 5」という、物質世界の無限ループの中で、お互いを責め合うだけのダンスを踊っていた。369 という高次元の視点がなければ、このループからは一生抜け出せない。

湊はふと思い出した。宇宙の始まりにおいて、物質と反物質は等しく存在し、本来ならすべてが打ち消し合って「無」に帰すべきだったのだと。しかし、そこにわずか 10 億分の 1 という、計算ミスの如き「ずれ」があったからこそ、消滅しきれなかった物質が残り、この星も、銀河も、自分という肉体も存在している。

「完璧じゃなかったから、世界は生まれたんだ……」

美咲との破綻も、母との確執も、自分自身の挫折も。完璧な調和からあえて「ずれた」ことで生じた摩擦。その不格好な残りカスこそが、今の自分を形作っている「存在の証」なのだと、湊は冷えた指先を見つめながら確信した。

ある深夜、湊はスマートフォンの電源を数分だけ入れた。
通知の嵐は相変わらずだったが、不思議と以前のような恐怖はなかった。画面に映る自分の顔写真は、もはや自分そのものではなく、この世界が作り出した「記号」に過ぎないと感じられた。

「僕は、0（ゼロ）になったんだ」

すべてを失い、誰からも理解されず、社会的な繋がりを断たれた。しかし、それは「無」であると同時に、何者にも定義されない「自由」でもあった。0は9であり、Nothingは Everything だ。

湊は窓の結露を指で拭い、外の夜景を見た。遠くに見える街の灯り、樹木の枝分かれ、ひび割れたアスファルトの模様。すべてがフラクタル状に、同じ法則で繰り返されている。自分の人生の失敗も、この巨大なフラクタルの一部なのだ。「転落」したと思っていたこの日々さえも、実はより大きな「9（完成）」へと向かう螺旋の、ほんの一つのカーブに過ぎない。

「……一歩、踏み出そう」

湊は「新たな1」を意識した。それは、かつての「ひきこもり支援」で誰かに手を引かれて出した1歩ではない。0という無の地点に立って、自分の意志で、自分だけの重力で踏み出す「1」だ。
「人生に、良いも悪いもない。ただ、経験という名の数字が積み重なっていくだけだ」

湊は、眠っていた子供への愛着も、美咲への割り切れない感情も、すべてを「9」という大きな器に放り込んだ。そして、冷え切った身体を起こし、家へとハンドルを回した。それは「戻る」ためではない。この複雑で、美しく、理解不能な数式のような現実と、真っ向から対峙するために。

第三章：解けない数式との決別―― 不完全な生の肯定 ――
湊が数ヶ月ぶりに家の敷居を跨いだとき、鼻を突いたのは生活の饐（す）えた匂いと、逃げ出したあの日から時間が止まったままのような、奇妙に歪んだ空気だった。

リビングには、やつれながらもどこか「悲劇のヒロイン」としての光を瞳に宿した美咲と、その横で腕を組み、憤怒を顔に張り付かせた母が座っていた。

「……よく、戻ってこれたわね。ネットであんなに叩かれて、世間に顔向けできないでしょうに」
母の第一声は、息子の安否を気遣うものではなく、「世間体」という檻の再確認だった。昭和の教育を信奉し、4（安定・秩序）という数字の枠からはみ出すことを罪とみなす母にとって、湊の家出は「数式の書き間違い」でしかない。

美咲は、湊と目が合うなり、大粒の涙をこぼした。
「どうして……どうしてあんな残酷なことしたの？ 私は一人で、どんなに惨めな思いで子供を育てていたか。SNS のみんなも言ってた。あなたは病気だって。治療が必要だって」

彼女の言葉には、湊個人の人格は存在しなかった。あるのは、ネットの集合知（124875 のループ）によって定義された「悪しき夫」という記号だけだ。彼女は湊の顔を晒したことの危険性など、これっぽっちも理解していない。ただ、自分を正当化するために、宇宙を自分の都合の良い形に捻じ曲げている。

湊の眼前にいる美咲は、相変わらず理解不能な言葉を投げつけてくる。かつての湊なら、実験室で生成される DNA のように「右も左も等しく存在するはずだ」という正論（論理的対称性）で彼女を正そうとしただろう。数学的な正しささえあれば、対話は成立すると信じていた。

しかし、現実の生命はすべて「左巻き」の螺旋を選び取っている。実験室では左右等しく作れるはずなのに、この世界の命は理由もなく、ただ一方の方向へと偏っているのだ。目の前の彼女という存在も、この宇宙が選んだ一つの「偏り」に過ぎない。実験室の綺麗な数式では測れない、生命特有の強引な指向性。湊はその「解けない螺旋」を、もはや解こうとはしなかった。ただ、そこにある一つの物理現象として、静かに見守る術を身につけていた。

湊は、以前ならここで「論理的」に反論し、そして言葉の通じなさに絶望していただろう。だが、今の彼は違った。
「美咲、君の言う通りかもしれない。僕は君たちの期待する『正しい数字』にはなれなかった」
湊の静かな声に、二人が虚を突かれたように黙る。

「でも、もう僕を鏡に映して自分を測るのはやめてくれ。美咲、君は子供を愛していると言いながら、実際には母さんに預けてスマホの中に逃げている。母さんも、僕を

愛していると言いながら、近所の目を気にしているだけだ。……僕たちは、お互いを透明な檻に閉じ込め合っていたんだよ」

ここからの話し合いは、泥沼の様相を呈した。「親権」という言葉が出た瞬間、美咲は狂ったように叫び、母は世間えの悪さに激昂した。それは、男の論理では到底太刀打ちできない、感情の嵐だった。

しかし、湊は揺らがなかった。彼は数ヶ月の車中泊で学んでいた。女性という不可解なカオスも、母という古い秩序も、否定するのではなく「ただ、そこにあるもの」として受容する。戦うのではなく、淡々と「369」の視点で、現実的な事務手続きを進めていく。

生活力の乏しい美咲、外面を気にするあまり実態を失っている家庭環境。湊は支援団体の助言も仰ぎながら、感情論を排し、子供にとっての「0（フラットな出発点）」はどこにあるのかを問い続けた。

数ヶ月に及ぶ調停と話し合い。結局、美咲は「育児という重責」から解放されたいという本音を、自分自身でも気づかないうちに漏らし始めた。彼女にとって子供は、愛すべき存在であると同時に、自分の自由を奪う「檻」でもあったのだ。

離婚成立の判決が出た日。湊は、一人分の荷物と、小さな子供の手を引いて役所を出た。母は「恥ずかしい」と泣き、美咲は最後、憑き物が落ちたような顔で「あなたはやっぱり、最後まで冷たい人だった」と言い捨てて去っていった。その言葉さえ、湊にはひとつの周波数のように聞こえた。
理解不能。でも、それでいい。彼女には彼女の、僕には僕の、描き出すべき図形がある。

空は高く、あの日見た「9」を象徴する月が、薄く昼の空に残っていた。湊は、子供の小さな手の温もりを強く感じた。この柔らかい手のひらこそが、今、彼にとっての唯一にして最大の「1（真実）」だった。
「さあ、行こうか」
誰と比較することもない。過去を呪うこともない。湊は、黄金螺旋の次の一周へと、静かに足を踏み出した。

終章：369 の調べ―― 宇宙の拍動とハンバーグ ――
あれから一年が経ち、湊の朝は目覚まし時計が刻む「3」の倍数のリズムで始まるよ

うになった。

午前６時。台所に立ち、朝食の準備をする。
卵を割り、味噌汁の湯気を眺める。かつては「ひきこもり」だった自分、そして「逃亡者」だった自分が、今では一人の子供を生かすために包丁を握っている。父子家庭としての毎日は、想像以上に地味で、そして忙しい。洗濯物を畳み、保育園の連絡帳を書き、仕事へ向かう。そこにはかつて夢見た「ドラマチックな幸せ」などどこにもない。しかし、湊の心は不思議なほど凪いでいた。

ある土曜日の午後、湊は公園のベンチで、砂場で遊ぶ娘を眺めていた。ふと、足元に落ちている松ぼっくりを拾い上げる。その鱗片の並びを数えてみる。右に８本、左に13 本。フィボナッチ数列。自然界が最も安定し、最も美しく成長するために選んだ数字だ。

「……3、6、9、か」

湊は小さく呟いた。かつてテスラという天才が愛し、宇宙の鍵だと信じた数字。最近、湊は自分なりにその意味を解釈している。

「3」は、自分という個。過去、現在、未来を抱えて生きる意志。「6」は、他者や社会。調和を求め、時には衝突し、裏表の二元性に苦しむ世界。「9」は、それらすべてを包み込む宇宙の理。良いことも悪いことも、出会いも別れも、すべてを「経験」として統合し、無（0）へと帰す大きな愛。

娘が「パパ、見て！」と、砂で作った歪な山を指差す。

その背中を眺めながら、湊はふと思う。もし宇宙のパターンが無限にあるとするならば、別の宇宙では、美咲と手を取り合う湊や、今も檻の中で震えている湊もいるのかもしれない。物理法則さえ異なる世界では、後悔という概念すらない場所もあるだろう。

けれど、今の湊はこの「369」が響く、この宇宙のこの法則を選び取った。わずかに歪み、左に巻き、そして０に向かって収束しながら９へと広がる、この不完全で愛おしい螺旋の軌道。その上を歩いていることが、今の湊には何よりも誇らしかった。

その山も、いつかは風に吹かれて平らな砂地に戻るだろう。形あるものはすべて

「0」に帰る。けれど、その山を作ったという娘の喜びや、それを眩しく眺める湊の記憶は、「9」という永遠のデータの中に刻まれ続ける。

「そうだね、上手だね」

湊は立ち上がり、娘の元へ歩み寄った。かつて自分を縛っていた「透明な檻」は、もうどこにもない。自分が「正しい数字」であろうとすることをやめたとき、檻は消えたのだ。

社会の批判、元妻の理解不能な激情、母の押し付け。それらすべては、宇宙が描く巨大なフラクタル模様の一片に過ぎなかった。自分がその模様の一部であると受け入れたとき、湊は初めて、自分自身の人生の「解」を見つけた気がした。

人生は、何度転んでもいい。その度に立ち上がり、また一歩を踏み出す。その足跡が描く軌跡こそが、自分だけの黄金螺旋なのだ。
湊は娘の手を握りしめた。

「さあ、帰ろう。夕飯は何がいい？」
「ハンバーグ！」
「いいよ。３つ作ろうか」

二人の笑い声が、午後の光の中に溶けていく。
3、6、9。その調和の音は、騒がしい日常のすぐ裏側で、今日も静かに、そして完璧に響き続けていた。

（物語　完）

おわりに：登場人物解説

湊（みなと）：
本作の主人公。ひきこもりという停滞（3）から、家庭崩壊の嵐（6）を経て、すべてを受容する統合（9）へと至る。自らの人生を数学的な視点で捉え直すことで、絶望を「経験」へと昇華させた。

美咲（みさき）：
湊の元妻。感情の振れ幅が大きく、男の論理では計り知れない「カオス」を象徴する。悪意があるわけではないが、自分を正当化するために他者を犠牲にする危うさを持つ。

湊の母:
「昭和」という過去の秩序に生きる女性。世間体や固定観念（4）を重視し、湊を愛していると言いながらも、実際には自分の信じる枠組みに彼を閉じ込めようとしていた。

ひきこもり支援団体の人:
湊の「檻」の扉を最初に叩いた人物。彼が発した「数字の裏表」という言葉が、後の湊の救いとなる。

ネット仲間:
匿名性の影から「正義」を振りかざす群衆。一次元の情報だけで人間を裁く、現代社会の歪んだ鏡。

娘:
湊にとっての「1」。何にも染まっていない真実であり、彼が新たな螺旋を昇り続けるための光。

あとがき：問い続ける螺旋のなかで

本書『透明な檻の中で６ 』～黄金の螺旋を昇る～　を最後まで読み進めていただき、心より感謝申し上げます。

「透明な檻の中で」シリーズは、これまで当事者やご家族、支援現場のリアルな声を紡いできました。第６作目となる本作では、少し趣向を変え、「数理」という一見すると無機質なフィルターを通して、混迷を極める現代社会の人間模様を切り取る試みを行いました。

執筆の背景：テスラコードと現代の孤独

ニコラ・テスラが残したとされる「369」の法則。これをプロットの核に据えたとき、この物語は単なる「ひきこもりの更生譚」を超えた意味を持ち始めました。

現代社会において、私たちは常に「0 か 1 か」「敵か味方か」というデジタルな二元論で裁かれています。SNS での炎上や家族間の断絶は、まさにこの「遊び（余裕）」のない数式が生み出した悲劇といえるでしょう。

私たちは今、SNS という名の巨大な演算装置の中で、常に「正解」か「不正解」かを判定される時代に生きています。しかし、現実の人生は「1+1=2」のように端麗な答えが出るものばかりではありません。

0 と 9、そして人間社会の「ノイズ」

主人公・湊が辿り着いた「9」という境地。それは、すべてを許すことではなく、「理解不能なものをも、宇宙の調和の一部としてそのまま受け入れる」という静かな諦念と強さでした。

元妻・美咲が放つ感情の嵐も、母が固執する旧時代の秩序も、それ自体はひとつの「周波数」に過ぎません。それらを無理に解こうとするのではなく、宇宙の巨大なフラクタル（自己相似）の一部として眺めてみる。そうすることで初めて見えてくる「救い」を描きたいと考えました。

螺旋を描くということ

物語の結末で、湊は劇的な成功を収めるわけではありません。父子家庭という、ある種「不完全」で慌ただしい日常に戻っていきます。しかし、かつての彼と決定的に違うのは、自分の人生を「直線（行き止まり）」ではなく、「螺旋（巡りながら昇るもの）」と捉えている点です。

同じような失敗を繰り返しているように見えても、私たちは一周前よりも高い視点に立っている。その微かな高低差こそが、人間が生きる意味なのかもしれません。

湊の娘が砂場で作った「歪な山」は、いずれ消えてしまいます。しかし、その瞬間、二人の間に流れた空気は、数式では割り切れない「永遠」を孕んでいました。

シリーズのこれから
本作で湊は自分なりの「解」を見つけましたが、人生がこれで完成したわけではありません。人間社会という名の檻は形を変え、また私たちの前に現れるでしょう。

この「透明な檻の中で」シリーズは、完結することなく、これからも不定期に続いていきます。時代が変わり、社会の歪みが形を変えるたびに、また新たな切り口から「生きづらさ」の正体を探っていきたいと思っています。

私たちは皆、透明な檻の中にいるのかもしれません。ですが、その鍵はいつだって、自分自身の「定義」の中に隠されているのです。

一年前の自分より、ほんの少しだけ高い視点から景色を眺めることができたなら。その時、私たちは檻の中にいながらにして、自由になれるのかもしれません。湊と娘が歩み始めた黄金螺旋の続きは、またいつか、別の物語でお話しできれば幸いです。

この本を閉じた皆様の日常にも、ふとした瞬間に「369」の調べ――調和と安らぎ――が響くことを願ってやみません。

騒がしい日常の裏側に流れる、完璧な調和の音に耳を澄ませながら。冬の長い夜を越え、柔らかな光が差し込む季節を待って。

令和８年 立夏

KHJ 岡山きびの会　　ふじさん